日本におけるヒップホップ文化の浸透

田邊　信弘
（手塚　恵子ゼミ）

目　次

1.　はじめに
2.　第一章　ヒップホップとは
　第一節　ヒップホップの歴史
　第二節　ラップとは
　第三節　三人のカリスマ
　第四節　三人の与えた影響
3.　第二章　日本のヒップホップ
　第一節　日本のヒップホップシーン
　第二節　ブレイクダンサーと DJ
　第三節　90 年代の東京のヒップホップシーン
　第四節　ヒップホップシーンの成熟・脱東京化
　第五節　現在のヒップホップシーン
4.　第三章　他文化との比較
　第一節　アメリカのロック
　第二節　日本のロック
　第三節　ロックシーンとヒップホップシーンの比較
5.　第四章　農耕民族としてのリズム感
　第一節　リズム感の成り立ち
　第二節　リズム感の比較研究
　第三節　日本の子どものリズム感
　第四節　おわりに
6.　さいごに

はじめに

本論文のテーマは「日本におけるヒップホップ文化の浸透」である。これを論文のテーマに設定した理由は、70 年代のアメリカ、サウス・ブロンクスで生まれたヒップホップは世界的にはヒップホップはメジャーな音楽で世界中の人々に楽しまれているのにも関わらず、日本では一部の人にしか聴かれていないマイナーなものとなっており、他の国に比べればあまり聴かれていないという現状に疑問を覚えたからである。

日本のヒップホップ MC である AKLO[1] はインタビューでこう話している、「世界的に日本ほど HIPHOP が流行ってない国ってないし、それって超ダサイと思うんです（笑）。US や UK のポップ・チャートなんて HIPHOP ばっかじゃないですか。」（Amebreak[2] より引用）。2016 年現在ではテレビ番組「フリースタイルダンジョン」の影響を受け以前に比べヒップホップ人気が出てはいるが、未だマイナーなジャンルでしかないと思われる。それはなぜかを本稿で考えていきたい。

第一章　ヒップホップとは

第一節　ヒップホップの歴史

ヒップホップは 1970 年代、アメリカのニューヨークのブロンクス区で発生したものである。ブロンクス区は貧困街であり、そこに住むアフリカ系アメリカ人が金のない者でもパーティーを楽しめるように公園で集まり始めたのが起源である。このパーティーは「ブロック・パーティー」と呼ばれ、家からターンテーブルやレコードを持ち運び、その音楽でダンサーは踊り、グラフティーアーティストは壁などに絵を書き楽しんだ。ヒップホップの根幹は金が無い若者でも文化的な要素を楽しむということにあり、それを用いて自己の存在を主張するのである。

ヒップホップと聞けば頭に浮かぶのはおそらく音楽だと思われる。しかし、ヒップホップは音楽だけを指すものではなく黒人文化の中から成り立った文化である。これらは、「DJ」「MC」「グラフィティ」「ブレイクダンス」の 4 大要素から成っている。「MC」とはラッパーのことを指しており文字通りラップをする人である。「DJ」は「Disk Jockey」の略で一般的にはターンテーブルを 2 台同時に使用し音楽を流す役割を担ってい

る。後に記述するクール・ハーク、アフリカ・バンバータ、グランドマスター・フラッシュなどが3大DJとしてヒップホップ黎明期に活躍した。「グラフィティ」はブロンクスに住む少年たちのグループが縄張りを示すためにスプレーなどを使い壁に文字や絵を描いたのが始まりである。この「グラフィティ」は落書きとしか思われていないこともあるが、アートとして認められている一面もある。現代のグラフィティアーティストとして有名なバンクシーの書いたグラフィティはオークションにかけられ高額な値段で取引されている。「ブレイクダンス」はアクロバティックなダンスのことである。なぜブレイクダンスと呼ばれるようになったかというと、曲中のブレイクビーツ、つまりパーカッションのみの部分に合わせて踊り始めるダンサーが多かったためブレイクダンスと呼ばれている説がある。ブレイクダンスにもバトルが有り、ギャング間の争いを武器を使わずに決着をつけるために行われていた。一人対一人のバトルもあれば、複数人同士のバトルもある。

ヒップホップはストリートギャングと関係が深く、暴力的なイメージが強いかもしれないが、争いを平和的に解決するためのものでもある。これらの4大要素に「知識」「言語」「服装」「企業精神」「ビートボックス[3]」を加え9大要素とすることもある。

第二節　ラップとは

ラップ（Rap）という言葉にはいくつか意味がある。一つは「打つ」「叩く」、ふたつ目は「叱責」「避難」「告発」「告訴」、そして最後に「おしゃべり」などがある。これらの意味から「急いで読む」や「早口でしゃべる」のような意味に転用されることもある。ラップは元々「RAPPORT」といい、フランスから来た単語であり「親密な関係」という意味で、「話し合うことでお互いが親密な関係になれる」というのが本来の意味である。ラップミュージックの基本的なリズムパターンを生み出したのは1960年のファンクの元祖ジェームス・ブラウン。ラップは音楽ジャンルではなく、歌唱法を指す言葉である。

ラップが誕生したのはブロック・パーティーだという説もあるが、アフリカン・グリオ（文盲者に口伝で歴史や詩を伝える者たち）がルーツという説もある。キング牧師やマルコム X[4] のスピーチにも影響を与えている。

第三節　三人のカリスマ

・DJ クール・ハーク

本名はクライヴ・キャンベル（Clive Campbell）ジャマイカ、キングストン出身。ブロンクス区には様々な人種が住んでおり、当初は閑静な住宅地であったがマンハッタンの高速道路建設に伴い貧民がこの場所に押し込められる形になった。そして元々いた白人が組織するギャングと、新しく来た有色人種のギャングの抗争が始まった。クール・ハークはブロンクス区に移住してきて、わずか15歳にしてパーティーを開催して DJ を始めた。クール・ハークのパーティーの評判は直にブロンクス区中に広まった。クール・ハークは曲の中で間奏部分が一番盛り上がることに気づき、ジャマイカで体験したサウンドシステムをベースに、曲中のパーカッション部分だけを延々と繋げる手法を生み出した。この部分をブレイクビーツと呼び、ダンサーはこの部分に合わせて踊り始める。これがヒップホップの音楽シーンの始まりで、DJ の基本を創りだしたのである。

・アフリカ・バンバータ

本名はケヴィン・ドノヴァン（Kevin Donovan）。バンバータはブロンクス区のリバーサイドにて生まれ育ち、自身はギャングのリーダーを務めていた。黒人人権運動に参加していた母親と叔父に影響を受け、そして母親の持つ様々なジャンルの音楽レコードにも触れる機会があった。叔父であるバンバータ・ブンチンジは有名なブラックナショナリスト[5]で、熱心なブラック・ムスリム教団[6]の信者だった。バンバータはクール・ハークの DJ プレイに魅せられ DJ の技術を身につけた。当時のブロンクス区はギャングが地域を取り仕切っており、ギャングによるドラッグ売買を阻止するためや、自分の仲間を守るために戦い、パーティーを開いた。

バンバータは抗争を繰り返すアメリカの黒人に疑問を覚え、自分たちのルーツであるアフリカに住む黒人の生活を見るためアフリカへと渡った。

そして、貧しいながらも生き生きと暮らすアフリカの黒人たちの姿を見て驚き、自分たちも独自の文化を持つことができれば変わることが出来るのではないかと思い立つ。アフリカの地域社会のあり方に感銘を受け、ニューヨークでの暴力的な活動をやめることを決心する。その後、ギャングの縄張りを平和親善のために活用する方法を考え出す。自身のギャング団をブロンクス・リバー団体へ変化させ、ヒップホップパーティーをクール・ハークらと共に主催し始める。その後団体名を改名し「ズールー・ネーション」を立ち上げた。このズールー・ネーションは暴力やドラッグの無意味さを訴えて、ギャングたちのエネルギーをヒップホップへと向けさせ盛り上げていった。1973年11月12日に現在のヒップホップ文化をヒップホップと名付け、「MC」「DJ」「グラフィティ」「ブレイクダンス」と定義つけたのである。

・グランドマスター・フラッシュ

本名はジョセフ・サドラー（Joseph Saddler）、バルバトス出身でブロンクスにて育つ。グランドマスター・フラッシュはクール・ハークからDJを学び活動を始めた。現在のDJたちにとって欠かすことの出来ないスクラッチを完成させ広めたのはグランドマスター・フラッシュで、アフリカ・バンバータとクール・ハークに並びヒップホップ黎明期を支えた人物である。この三人は皆カリビアン・ルーツ[7]であり、ヒップホップをアフリカン・アメリカンルーツの音楽とするには疑問が生じる。20世紀に発生した黒人音楽の中でもヒップホップは独自の出自を持つ音楽である。

第四節　三人の与えた影響

三人の与えた影響は現在のヒップホップの根源となっている、しかし彼らが伝えたかった形でそのまま伝わっているとは言えない。例えばグラフィティなどが迷惑行為として取り締まられていたり、路上で大音量の音楽を流しながらダンスをしたりモラルに反する行為が多発したためにヒップホップに嫌悪感を持つ人も多くいると思われる。これはヒップホップの悪い面だけを知ったものが「ヒップホップ」=「アウトロー」と間違った捉え方をして形だけを真似し、自分の存在を主張するためだけに利用しているからである。ヒップホップを文化として伝えていくには本来あるべき姿を正しく伝えていく事が必要である。特に日本では文化としてのHIPHOPを知られていないがためにグラフィティはただの落書きでしかなく、音楽は騒音でしかないのである。HIPHOPは自己表現をするには適した表現方法だが節度を守らなければ一般の人々から見れば迷惑行為になってしまうのである。正しい知識を持ち「HIPHOP」するという事が大切で、アフリカ・バンバータが5つ目の要素として「知識」を加えたのは意味を履き違えた「HIPHOP」をさせないためだろう。HIPHOPとはストリートに蔓延する薬物や暴力、人種差別や自己嫌悪などのネガティブなものから切り離し、Peace（平和）、Love（愛）、Unity（結束）& Having Fun（楽しむこと）を目的としポジティブなものへと変えるものだと提唱者であるアフリカ・バンバータは言っている。

第二章　日本のヒップホップ

第一節　日本のヒップホップシーン

日本で初めてリリースされたヒップホップ作品は、YMO[8]の『Rap Phenomena』である。この曲は、YMO五枚目のアルバムである『BGM』（1981年）に収録されている。YMOは細野晴臣、坂本龍一、高橋幸宏の三人によって1978年に結成されたテクノポップバンドである。『Rap Phenomena』は細野晴臣が作詞したが、これをピーター・バラカン[9]が英訳して細野晴臣が英語でラップをしている。YMOはもうこの時点でアメリカからヒップホップを輸入していた。この他にもスネークマン・ショー[10]のアルバム『スネークマン・ショー』（1981年）による『咲坂と桃内のごきげんいかが1・2・3』などといったラップ調の曲はあったが、それがヒップホップを意識して作られたのかは定かではない。この時点ではまだヒップホップを本格的に取り入れた音楽グループは存在していなかった。

坂本龍一[11]のアルバム『B-2ユニット』（1980年）に収録されている『Riot In Lagos』はアフリカ・バンバータによりサンプリングされており、YMOが示した方法論の多くをヒップホップ側が

転用した。アフリカ・バンバータはクラフトワーク[12]とYMOから強い影響を受けたと言っている。そして細野は数々のラップソングを制作し、1983年にはヒップホップユニット、FOE（フレンズ・オブ・アース）を結成してミニアルバムを3枚リリースした。

第二節　ブレイクダンサーとDJ

日本のヒップホップ受容の初期段階はブレイクダンスから大きな影響を受けた。1983年に公開された映画『フラッシュダンス』、この映画の中で数分、ロックステディークルー[13]が踊るシーンが有る。そこでは、Jimmy Castor Bunch[14]の『It’s Just Be Gun』が使用された。当時、日本でブレイクダンスをしていたクルーが2つある。一つは浜松のアップルパイオールスターズと東京のTokyo B Boysである。Tokyo B BoysのCrazy-A[15]はロックステディークルーの日本支部長となりブレイキングシーンを牽引し、ヒップホップイベントのTokyo B Boy Park[16]を開催した。84年にはブレイクダンスが一気に広まった。

同年にDjクラッシュ[17]、MURO[18]といったシーンの中心となる人物が活動開始する。この頃はまだ、DJやMCよりダンサーがシーンの中心だった。翌年85年にアフリカ・バンバータが日本に来日し、86年にはRunDMC[19]による『Walk This Way』が世界的にヒットした。そして日本で初めてヒップホップ専門のクラブ「HIPHOP」が渋谷にオープンする。このクラブは4台のターンテーブルを同時に使う2DJなどが登場したり、スクラッチやレコードの二枚使いなどの斬新なアイデアが試された歴史的なクラブである。87年にはパブリック・エネミー[20]が来日し日本の音楽シーンにも少しずつヒップホップが定着し始める。

第三節　90年代の東京のヒップホップシーン

90年はYouTheRock[21]やガス・ボーイズ[22]がデビューしシャカゾンビ[23]などが現れた。92年にマイクロフォンペイジャー[24]が結成する、これはここまでのヒップホップのメジャー化思考に対するアンダーグラウンド勢の巻き返しの兆しとなった。93年には海外の大物ラッパーの来日が続き、日本でもキングギドラ[25]やラッパ我リヤ[26]などの重要グループが結成する。94年に日本のヒップホップは2大ヒット曲を生み出す。一曲は、イーストエンド×ユリ[27]の『DA・YO・NE』であり、もう一曲はスチャダラパーと小沢健二による『今夜はブギーバック』である。前者はヒップホップCDとしては初のミリオンセラーを記録し、後者は50万枚を売り上げた。多くの人々が日本にヒップホップというものがある事に気づいた瞬間だったといえる。96年にブッダブランド[28]が日本に帰国し『人間発電所』をリリースする。そして、ECDが主催する日本最大のヒップホップイベント「さんぴんCAMP」で大トリ出演する。この年から地方でもヒップホップが盛り上がり始める。このあたりから日本のヒップホップシーンは大きく変化し始め、日本のヒップホップは成熟期を迎えようとしていた。

第四節　ヒップホップシーンの成熟・脱東京化

1999年に北海道出身のザ・ブルーハーブ[29]の『Stilling Still Dreaming』がリリースされた。このアルバムは痛烈な東京Disを込めた作品で、東京至上主義への異論として捉えられ、日本の音楽産業が始まって以来初の脱中心的思考が見られた。同年にDragon Ash[30]がZEEBRA[31]と共に発表した『Grateful Days』は見事にロックとヒップホップをミックスさせ、日本のシーンに大きな影響を与えた。

2000年に入ると多くのアルバムがリリースされた、日本がアメリカのヒップホップから離れ独自の道を進み始めるのはこの頃である。20世紀に入ると、日本のヒップホップシーンはメジャーシーンにはっきりとした影響を持ち始めた。それと同時に地方から登場する才能に、「東京に出て成功する」という考えに終焉をもたらした。

第五節　現在のヒップホップシーン

2015年から2016年はここ最近では考えられないほどHIPHOPが世間でも注目された年であることは間違いない事であろう。まず2015年の夏に学生団体であるSEALDS[32]のデモではラップ調のコールが行われていた。このデモには多くの若者が参加していたが、若者だけでなく中高

年の人々も参加していたのである。そしてラッパーであるECD[33]やスチャダラパー[34]なども参加しHIPHOP色が強く、デモの合間のライブでは音楽に合わせて身体を揺らす中高年の人の姿を見ることが出来た。これは今までHIPHOPに関わることの無かった人がHIPHOPに触れることが出来る機会が出来たという事である。しかし、SEALDSのラップ調のコールは中高年の人々には難しいという声も出ていたようである。

次にBSスカパーにて放送されているバラエティ番組のBAZOOKA!!!のコーナーのひとつである「高校生ラップ選手権」。これは2012年7月に第一回が開催され、現在は第十回まで開催されている。日本全国の高校生が8小節2ターンを交互にフリースタイル[35]でMCバトルをして優勝を競うもので、勝敗は審査員の多数決による判定で決める。高校生のMCバトルだけではなく、ラッパーによるライブも行われている。

次に「フリースタイルダンジョン」。これは2015年9月からテレビ朝日で深夜に放送されているテレビ番組である。この番組が2016年の日本語ラップブームの火付け役と言っても過言ではない。高校生ラップ選手権と同じくフリースタイルのMCバトルを行い、「モンスター」と呼ばれるラッパーを勝ち抜いて賞金100万円を獲得する事を目指す。番組側のラッパーを「モンスター」と呼び、審査員の判定が全員一致した場合を「クリティカルヒット」と呼ぶRPG要素を取り入れている。視聴者にも歌詞をわかりやすくするためにテロップで字幕が表示されるなど配慮がされている。初期の頃には公式で動画配信サイトであるYouTubeにて番組が配信されており、これが多くの人の目に止まり話題を呼んだ要因の一つであると思われる。MCバトルだけではなくバトルで使われる楽曲の権利許諾に大きな負担がかかるために現在ではYouTubeには配信されていない。その代わりに「AbemaTV」という無料のインターネットTV局で放送されているため、民放で見ることの出来ない地域の人でも見ることが出来る。

このフリースタイルダンジョンという番組のヒットからメディアなどにHIPHOPがとりあげられる事が増えている。最近ではTVCMにもラッパーが出演したり、ラップが多用されている。少なくとも15以上の企業のCMに使われている（ドコモ、第一生命、キリンビール、トヨタetc…）。CMだけでなくテレビ番組でも特集が組まれ、雑誌や書籍でもHIPHOPを扱うものが増えていっている。

第三章　他文化との比較

本章ではHIPHOPと同じように海外で生まれ発展したロックと比較する。ロックは今現在日本でも非常に人気があり誰もが聴く音楽になっている。このロックも日本に輸入された当時は日本でロックをすることは出来ないと言われていたのである。しかしロックは日本に定着し、HIPHOPは未だ定着していない。この様になったと思われる要因を2つ見つけることが出来た。本章ではその要因について書いていく。

第一節　アメリカのロック

ロックの原型であるロックンロールは1950年代に出現した。起源はアラン・フリードというラジオDJが、黒人歌手であるTrixie Smith[36]の「My Daddy Rocks Me（With One Steady Roll）」という曲から思いつき命名した。ロックンロールとは、1955年頃に流行した黒人のR&B（リズム＆ブルース）と白人C&W（カントリー＆ウェスタン）を合成した音楽で、ブルースやカントリーなどと比べて人種に縛られない音楽であった。そして、ロックンロールとヒルビリー・ミュージック（大衆音楽を取り入れた民族音楽）を合成したロカビリーが誕生し流行する。60年代に入るとロックンロールが全盛期を迎え、ロックンロールは分裂期に入る。分裂とはロックの中でもブルースロックやフォークロック、ジャズロックなどのロックの派生系が生まれるということを指している。62年にはビートルズがデビューし、ブルースロックが活発化する。ブルースロックとは白人がブルースとロックを結びつけたものである。そして65年にはボブ・ディラン[37]がフォークミュージックにエレキギターを持ち込み、ロックのリズムで歌い始めフォークロックが誕生する。フォークロックはこれ以降のソフトなロックなどに大きな影響を与えている。ビートルズが世界的にヒットした

67年から68年には、ビートルズも影響を受けた現代文明を批判して平和運動をするヒッピーフラワームーブメントが起きる。

70年代初頭にハードロックが確立する。71年にはニューソウルが台頭してくる、これはソウルのポップ化したという事である。ソウルとはゴスペルとブルースから発展し生まれた音楽で、R&Bの一種と言える。そして73年にロックが大衆化する。その頃ハードロックがレッド・ツェッペリン[38]やディープ・パープル[39]などのヒットにより全盛期を迎える。76年にパンクロックが台頭する。77年にはロックとジャズのクロスオーバー化が進み、78年にはロックとジャズが交わったものがフュージョンとして確立する。その頃ロック世代だった大人向けのメロウなロックであるAOR（アダルト・オリエンテッド・ロック）が注目された。

80年はユーロビートが流行し、産業ロック化が進む。産業ロックとはポップでキャッチーな曲調のシングルヒット狙いの曲のことである。批評家達は軽蔑の意味を込めて産業ロックと呼んだ。そして、イギリス系アーティストが全米チャートを独占するという第二次ブリティッシュインヴェイジョンが起こる。はじめは60年代にビートルズがアメリカ進出した際に始まり、第二次はユーロビートをMTV[40]などで流した事で大ブームを生み出したのである。この現象の後にはハードロックは衰退し始め、大物アーティスト達もディスコサウンド寄りになっていく。そして、クインシー・ジョーンズ[41]によってダンス・ミュージックが最盛期を迎える。84年から85年にはブラックミュージックの定着化が進み、ヘヴィメタルブームが到来する。そしてLAメタルブームが到来し、ロックとラップやファンクなどが融合したミクスチャーロックが確立する。ヒップホップミュージックが台頭してワールドミュージックがポピュラー化した。80年代の終わりには商業ロックに対する勢力としてオルタナティブミュージックが流行する。

90年代に入るとトリビュートアルバムブームが起き、ヒップホップアーティストの人気が全盛期を迎える。88年にイギリスで生まれたレイブというダンスの新しい傾向が広まる。レイブとは自由に踊り自己解放を目指したものでヒッピーにも似た側面を持っていた。92年にはエリック・クラプトン[42]の大ブレイクによりアンプラグドブームが起き、技術面ではCDのデジタルリマスター化が行われ始める。ロック界ではヘヴィメタルが衰退しプログレメタル、メロディックメタルが台頭する。95年にUKロック＆メロコアがニルヴァーナ[43]やオアシス[44]の活躍により見直された。また、当時ブームになっていたスノーボードのイメージビデオでコアパンクが多く使用されて注目された。97年にはユーロビートが復権し、ロック界ではテクノと融合したハウスというジャンルが生まれ、ラウドロックは全盛期を迎える。カントリーやブルースを取り入れた古典的なロックであるルーツロックの人気が出始める。2000年にラップメタルやメロコアが全盛期を迎えて、欧州ではシンフォニックロックがブームになる。そしてメロディよりリズム重視の時代が訪れ、音楽ビデオが次々にDVD化される。しかし、2006年にはメロディ重視に回帰すると共にヒップホップは衰退することとなる。2004年から2006年の間にUKロックとバラードのアコースティックサウンドが復権し、フリーインプロ主体のアンダーグラウンドミュージックが人気になる、フリーインプロとは即興で演奏を行う事や歌うことである。2007年に80年代サウンドが復活する。80年代サウンドとはデジタルシンセサイザーや打ち込みの機械的なサウンドのことである。

第二節　日本のロック

日本でのロックの始まりは、戦後に米軍が持ち込んだポップソングに影響を受けてブルースなどの要素が流行歌に入り込み、カントリー＆ウエスタン歌手だった小坂一也がエルヴィス・プレスリーの「ハートブレイク・ホテル」のカバーをしたのが始まりである。その頃からC&Wのバンドはロカビリー化して本場のロックンロールやロカビリーのカバーに専念し始めた。しかし、50年代末にはカバーによるヒットは出なくなり勢いはなくなっていく。1965年にザ・スパイダース[45]が国産オリジナルロック第一号としてデビューする。66年にはビートルズが来日し日本でもビートルズのファンが急増してマスコミによる報道も

過熱した。この頃には既に小編成のバンドも珍しく無くなっていたが、来日によりリヴァプールサウンドの模倣に走りグループサウンズブームが始まる。同年にスパイダーズが全曲オリジナルのアルバムをリリースし、グループサウンズの原型を作ったのである。しかしグループサウンズに人気が出るにつれて歌謡曲化してしまい、コアなロックをやりたい者たちはニューロックという言葉を生み出した。ニューロックとはレコード会社が分かりやすく分類するために作った言葉で、より自由な表現の方法を取り入れたものである。しかしこの言葉は使う人によって指し示すものが違っていたためにあまり使われなくなっていく。そしてグループサウンズも68年末から69年にかけて熱が冷めていく。

70年に入りはっぴいえんど[46]やRCサクセション[47]などがデビューする。そこでロックを日本語で歌うべきか、それとも英語で歌うべきかという論争が始まる。ロックは日本語では出来ないという論拠の内田裕也[48]と、日本語でロックを始めようとしていたはっぴいえんどなどの間で起こった議論である。結果として、はっぴいえんどが日本語だけで歌い上げているオリジナルアルバム「風をあつめて」を作り日本語でもロックができるということを証明したことにより論争は収束した。それ以降、日本語でロックを歌うことは当たり前のようになっていき現在の基礎を作り出したのである。そして72年にキャロル[49]がデビューする、このキャロルは日本語と英語を上手く混ぜて歌いあげて成功を収め、ロックマーケットを開拓しロックの大衆化に大きく貢献した。それからはロック専門レーベルの設立やライブハウスが次々に作られ定着していった。78年にサザンオールスターズ[50]や世良公則＆ツイスト[51]、RCサクセションがヒットチャートを席巻した、これを第一次バンドブームと呼び音楽誌で取り上げられるようになり、市場にロック勢力を確立させた。ヤマハが主催のコンテストである「EastWest」や「ポピュラーソングコンテスト」が開催されてバンドの登竜門となり、それまではラジオで流れた曲がヒットチャートに上がってからブームが来ていた流れだったが、メジャーデビューしてヒットチャートにあがりブームを作るという従来とは正反対の流れができた。メディアに依存せずにライブハウスで評価を得てメジャーデビューをするグループも増え始めた。

83年には誰もロックの存在に違和感はなかった。それまであった歌謡曲やポップとの間にあった境界線が無くなり、ロックが定着し大衆化したことがわかる。70年代にデビューしたRCサクセションやサザンオールスターズ、キャロルの矢沢永吉などはメジャーとなっていた。89年には第二次バンドブームを呼び起こす引き金となる「三宅裕司のいかすバンド天国」[52]が放送開始となる。この番組はアマチュアロックバンドのコンテストを行っており、これが刺激となって更にバンドの数は増えていったのである。この番組を経て多くのバンドがデビューする事になり、出れば売れるといった状態になりロックバンドが飽和状態に陥っていた。音楽業界はこの流れに乗ってバンドをデビューさせてブームが過ぎたら切り捨てる方法をとったのである。その結果としてアーティストは生き残るために、見た目のインパクトで勝負するバンドが出現し、大衆を意識したポップでキャッチーな曲を作り始めてポップロックが多数出現することになった。つまり、ロックが持っていた反骨精神は失われてしまい崩壊してしまったのである。

90年代に入ると第二次バンドブームは過ぎ去って行った。ロックは徐々にメロディアスなものになっていき、代わりにポップが創造性にあふれアバンギャルドな音楽となり立場が逆になったのである。しかし、このブームが終わって多くのバンドが消えたことにより、力のあるアーティストと販売側を見分けることが出来るようになった。更に90年はCMやドラマにタイアップして世間に刷り込みを行うタイアップ手法が主流となった年でもある。90年代後半になると、GLAY[53]、LUNA SEA[54]、L’Arc～en～Ciel[55]などのバンドがメジャーデビューを果たし、競いあうように大規模な野外ライブを開催する。この3つのバンドは次々にヒット曲を生み出していく、特にGLAYは500万枚近くの売上を獲得する、これを第三次バンドブームと呼ぶ。その後2000年代前半にも中高生を中心に青春パンクブームが起き、数々の大規模なロック

フェスティバルが開催され始める。このフェスティバルにより、レミオロメン[56]やオレンジレンジ[57]、ELLEGARDEN[58]などが台頭する。10年代にはアイドルブームと共にガールズバンドが台頭し始めて、次世代のバンドが活躍しYouTubeやTwitterなどのインターネットの力もありバンドブームが再熱している。ロックフェスも規模が大きなものではサマーソニック[59]、フジロック[60]、ライジングサン[61]、ロッキンジャパン[62]などがあり、およそ20万人を超える観客数の物もある。現在は小規模なものでも40以上ものロックフェスティバルが開催されている。

第三節　ロックシーンとヒップホップシーンの比較

今回調べた中でロックとヒップホップに関して2つの相違点を見つけることが出来た。一つは影響力を持った番組の有無、もう一つは力を持ったアーティストが居たかという事である。日本のロックにおける影響力を持った番組とは「三宅裕司のいかすバンド天国」のことである、この番組では多くのアマチュアバンドがデビューするきっかけとなっており、それによりバンドブームを引き起こし日本の音楽業界にロック市場を確立することが出来た。放送開始の89年には流行語にも選ばれており世間に大きな影響力を持っていた事がわかる。しかし、ヒップホップを取り扱った番組は「流派R[63]」（2001年）や「シュガーヒルストリート[64]」（2006年）などが放送されていたもののブームなどを起こせるような影響力は持っていなかった。

次に力を持ったアーティストである、ロック側には世界的に有名なビートルズが初期段階に世間にロックを広めた事、日本国内のアーティストでも初期である70年代にキャロルやRCサクセションが活躍しロックの定着に貢献していたといえる。一方ヒップホップでは小沢健二feat.スチャダラパーの『今夜はブギーバック』やEAST END × YURIの『DA・YO・NE』が大きなヒットを飛ばしたものの続けてヒット曲を出すことはなく、日本のヒップホップも衰退していき一過性のものでしかなかったと言える。

日本のロックとヒップホップの受容のされかたの違いについて調べた結果、日本にヒップホップが現在も定着出来ない理由が少しではあるがわかった。テレビなどのメディアの力は非常に強く、日本でヒップホップの一番勢いが有った90年後半から2000年前半に「いかすバンド天国」のような影響力を持った番組があれば一過性のブームで終わらずに市民権を得られていたのではないか思う。

本章では日本にHIPHOPという文化が定着しない理由をアーティストやメディアに求めたが、次章以降では、HIPHOP文化が定着しない理由を日本人の持つ独特のリズム感覚から考えていく。

第四章　農耕民族としてのリズム感

第一節　リズム感の成り立ち

日本人は水田稲作農耕を中心に暮らしてきており、自身が農業をしていなかったとしてもその文化を身近に触れていたはずである。水田では腰を落とし両手両足を交互に動かして後退または前進していく。この動きは基本的には静かな2拍子の動きになる。他に日本人のリズム感の成り立ちに関する事柄として挙げることができるのは「馬に乗る習慣も発達しなかった日本では、躍動的な身体の動きを身につける要因が日常生活のなかにないから、すべての動作が静かになった」（小島美子、1991年、p.895）ことである。

日本とヨーロッパの舞踊で比較すると身体の動かし方の違いが非常にわかりやすい。まず能は「腰の重心を低く落とした姿勢で立っていることが多く、歩くときもすり足で歩く。飛び上がる機会は少なく、瞬間的なものである」（小島、1991年、p.896）。対象的にバレエは”トウシューズを履いて爪先で立ち、できる限り重心を上に持っていき、飛び上がることが基本的な動きになっている”（小島、1991年、p.896）。ヨーロッパの民族舞踊は飛び跳ねる事が多いが、日本の稲作農耕地帯の盆踊りは重心を低くし基本的な動きは共通していることがわかる。

しかし、日本人すべてが静かなリズム感を持っているわけではない。山村の人々はダイナミックなリズム感を持っている。小島美子によれば、「宮崎県西北部の椎葉村は、九州山地のまっただ中に

あり、ほとんど斜面ばかりの村である。平らなところは家を建てたり水田を作ったりするために、人が手を加えたところだけで、人々はいつも坂道を歩き、急な斜面で仕事をしている。この村の神楽はすばらしくダイナミックなのだが、いろいろと調べた結果、神楽の際の体の重心は、軽く開いた両足のうちの片方の足の爪先、それも本当の爪先ではなく親指のつけ根の下あたりにあることが分かった。そしていつでも他の足に重心を移動させることができ、膝も極めて柔軟に屈伸している。ほとんどスポーツの体の使い方に近い。こうした体の使い方は実は、常に坂道を歩き、斜面で仕事をしている間に養われていたのである。」（小島美子、1991 年、p.896）とされている。日本の民俗芸能の中で躍動的なリズムを持ったものはどれも山伏神楽や番楽、鬼剣舞などの山村の芸能である。このことからリズム感と言うものは普段の生活での身体の動かし方により影響を受けている事がわかる。

第二節　リズム感の比較研究

日本人のリズム感は西洋人の持つリズムとは経験的に異なっていると言われてきた。そして言語の違いが原因の一つではないかという説のもと研究をした研究結果がある。

これまでに西欧語は次のような分類をされてきた。フランス語やスペイン語などのラテン系の言語は音節が等間隔で現れるためマシンガンリズム、英語やドイツ語は等間隔で現れるが、音節の現れる間隔が変化するためモールス信号リズムと呼ばれた。前者は音節基準言語、後者は強勢基準言語とも呼ばれる。リズム変動の測度としてnPVI（normalized Pairwise Variability Index）があり、音節基準言語では数値が小さくなり強勢基準言語では大きくなる。これは言語が音楽のリズムに影響を与えていることを指している。

(1) リズム知覚の日米比較

私たちは音楽や言語を理解するために連続的音系列に区切りをつける、つまりグルーピングをして音系列に含まれる情報を得ている。例として、時計の秒針を刻む音は同じ単音の等時的音系列であるのに「チク、タク」と表現されている。これは人間のグルーピングの仕方が生得的だからだと示唆されている。原則として「長い方の音はグループの最後の音になる傾向がある」とされる。「アメリカ人聴取者はグルーピングの原則のどおり、「短－長」グルーピングが有意に多く選択されていることを示している。一方、日本人聴取者は「長－短」のグループとして知覚した場合も多く、有意差は認められなかった。このことは、これまでの定説であったグルーピングの原則を覆す発見となった。なお、国内の 2 つの地域（新潟・東京）の在住者（新潟 21 人、東京 51 人）を対象にして同一の実験を行った結果、三つの地域で優位な差はないことが示された。」（大串、2010、p.8）

(2) リズム産出の日欧比較

日本人のピアニストは外国人とは異なった演奏をすることが指摘されている。そこで大串の実験では「欧州のピアニスト 20 人、日本のピアニスト 13 人、日本の大学の音楽学部ピアノ専攻大学生 27 人、同じく教育学部のピアノ専攻学生 27 人の演奏を音響的に分析し、日本人と欧州人のリズム表現の差異について検討した。」（大串、2010、p.8）音の立ち上がりから次の音の立ち上がりまでの時間を IOI（Inter － onset Interval）と呼ぶ。

研究結果では欧州ピアニストは楽譜よりも鋭いリズムで演奏をした。日本人ピアニストはほぼ楽譜の通りに演奏をし、学生ピアニストは楽譜より甘いリズムで演奏をしたことが実験によりわかっている。学生でも音楽経験の豊かな音楽学部生のほうが IOI 比は大きくなっている。別の実験結果でも同じく日本人は甘いリズムで演奏をした結果が出ている。

(3) リズム知覚の日米比較結果の解釈

(1) のリズム知覚実験結果からわかることは、リズムのグルーピングは普遍的なものではなく後天的な影響を受けているという事である。最も耳にする聴覚的刺激は言語である。そこで大串は言語が与える影響についての実験を行った。その結果では「英語話者とフランス語話者のグルーピングの仕方の比較を行ったところ、英語話者とフランス語話者の間に優位な差はなかった」とされている（大串、2010、p.9）。他に言語のリズム

に関係する要素として挙げられるものは統語構造である。「英語では function word（機能語：冠詞、前置詞、接続詞、助動詞などの、主として文中の他の要素との統語的関係を表す語の総称）が content word（名詞、動詞、形容詞などの文の意味内容を表わす語）よりも文章中では、the lake とか to walk などのように、先行することが一般的であるが、日本語では助詞があり、例えば「湖は」、「湖の」、「湖に」「湖へ」、「湖を」などのようにその逆の順序になることが一般的である。また一般的に言って function word の方が content word よりも音響的には短い場合が多い」（大串、2010、p.10）。これに関連する研究で日本とイタリアの乳幼児が語順に対して選択的に反応するという報告がされている。以上のことからこの２つがリズムのグルーピングに影響を与えている可能性が強いと思われる。

第三節　日本の子供のリズム感

日本人と西洋人のリズム感は異なっているのにもかかわらず、日本の学校教育では西洋音楽を学び、TV や街で耳にする音楽のほとんどは西洋音楽で日本音楽を聴くほうが難しい。つまり日本の子供は西洋音楽のリズム感を日常的に学んでいるのである。そこで現代の子供のリズム感の実態を調査するために水野伸子が学校教師 29 人にアンケート式の調査を実施した。その中のひとつに「子供のリズム感にみる社会的影響」という問がある。そこで、「子ども達は、毎日、意識するしないに関わらず、西洋音楽をシャワーのように浴びています（スーパー、ゲーム、外食店等）。子どもたちのリズム感は年々（昔、または少し前と比べて）良くなっていると感じますか？」（水野伸子、2014、p.56）という質問がされている。その結果、「非常に感じる」と答えた教師は 4%、「少し感じる」と答えたのは 41%、「あまり感じない」は 55%、「ほとんど感じない」と答えた者は 0% だった[65]。その結果を音楽教師に限定してみると 37%が「少し感じる」と答え、残りの 67%は「あまり感じない」と答え、「非常に感じる」と答えた音楽教師はいなかった[66]という事がわかったのである。このことからリズム感の良い子供は多くはなく、リズム感の優れた子供がいる一方、リズムにのれない子供がおり二極化している傾向にある事がわかる。

日本人の持つリズム感の特性から考えると、頭打ちのピョンコ節の曲が好きだと言われている。ヒットした曲の例を挙げるとするなら、日本の人気アイドルグループである嵐の「OneLove」が挙げられる。この曲はオリコン週間シングルランキングでは１位を獲得しており、年間ランキングでは二位を獲得している。

黒丸のところが拍を取る場所で、この曲は頭打ちで同じリズムが連続しておりピョンコ節といえる。

●　　●　　●　　●
ひゃくねーん｜さーきもー｜あいをち｜ーかうよー
●　　●　　●　　●
きーみは｜ぼーくの｜すーべて｜さー

逆に日本人が苦手とするのは裏打ちである。ヒップホップに多く見られる裏打ちの曲での例に GADORO の「クズ」を挙げる。

●　　●
ほんねやひょうじょうを｜かくしてきたしろいますく｜
●　　●
ひどいぎゃくふうに｜のまれながらひとりあるく｜
●　　●
たぐりよせることば｜そうぞうをぐげんか｜
●　　●
できればらくだって｜すべてシュレッダーにすてた｜

この様に日本で人気のある J-POP の曲には頭打ちのピョンコ節のリズムが使われており、ヒップホップには本来日本人が苦手とする裏拍のリズムが使われている。そしてヒップホップを特徴づけるのが、この裏拍のリズムなのである。

第四節　おわりに

現代化した日本社会でも農耕民族社会の名残が今でも根底には存在していて、農耕民族特有のリズム感を持っている事が西洋のリズムを全面に押し出したヒップホップに馴染めないひとつの要因ということがわかった。

また、日本人のリズム感覚が海外の人々と比べ

て平板的で甘いリズム感を持っているのは言語の影響があることもわかった。この日本人の持つリズム感覚にマッチするものは、音楽学者の間で「ピョンコ節」と呼ばれている日本のうたの最も素朴なノリだといえるだろう。ピョンコ節とは『タンタ / タンタ / タンタ』という風に飛び跳ねる感じのリズムの事を指している。HIPHOP はこのピョンコ節とはビートが違う、つまりリズムの取り方が違うのである。ピョンコ節は頭に拍が来る頭打ちである、HIPHOP などは基本的には裏拍である。4 拍子であれば、表の拍子で前のめりでリズムを取るのが日本人で、裏の拍で後ろのめりでリズムを取るのが欧米人である。

しかし、このリズム感覚も後天的なものであるから、耳や身体がそのリズムに慣れることが出来たなら適応することも出来るのではないかと思われる。日本にヒップホップが入ってきてからまだ約 30 年しか経っていないので、もう少し時が経てば日本にも馴染むのではないか。

さいごに

これまでの章で日本に HIPHOP が根付かない理由を、日本人のもつリズム感覚が HIPHOP には合わず馴染まない事や、ロックなどのようにこれと言ったヒット曲が続かずにメディアにほとんど取り上げられず新規のリスナーを獲得することが難しかったという点に見つける事ができた。

ではなぜ日本人には HIPHOP のリズムが馴染みにくく 2015 年以前はほとんどメディアにも取り上げられず日の目を見ることのなかったにも関わらず HIPHOP になぜ一定数のコアなファンがいるのかという疑問が残る。最後にこのことについて考察していく事にする。

これに関してはまず、ヒップホップミュージックはラップという歌唱法を駆使して歌うことから自然に言葉の数が他のジャンルに比べると非常に多くなる。そして言葉が多くなるとメッセージをそのままの形で曲に乗せることができるのである。そうすると歌っている MC の思想や人間性が曲に現れる。時には暴力的な表現や言葉になることもあるがその方がありのままを聴き手に伝えることができる。ヒップホップミュージックを聴く人々はそのメッセージ性に惹かれているのではないかと思われる。

そしてラップは韻を踏みながら歌うことが一般的で、その韻に面白さを見出してヒップホップミュージックを聴いている人々も多く存在するはずである。韻を踏むという行為はヒップホップミュージックだけのものではなく、その他の音楽でも一般的な手法である。しかし、ここまで韻をメインにした音楽はヒップホップミュージックだけである。つまり韻という物を音楽で楽しむにはヒップホップミュージックを聴くのが一番適しているのである。

次にラップの後ろで流れる音楽、つまりトラックである。ヒップホップのトラックは単純な構造の繰り返しになっている事が多く一定のリズムを刻んでいる。これはリズムを全面に押し出してノリを良くするためで、この単純なリズムの反復が心地良くてヒップホップミュージックが長く聴かれている理由の一つと言えるだろう。またトラックにはサンプリングという手法が取られる事があり、このサンプリングとは別の音源から音や歌詞の一部を引用するという事である。サンプリングにより引用された部分の元ネタを探るうちに普通では触れることのできなかった音楽やアーティストなどに触れることが出来る可能性もあるのである。一つの曲から多数の音楽を知るという楽しみ方もあるということである。

ファンの人々はヒップホップには、他のジャンルに無いメッセージ性とリズム、韻の面白さがある事を知っていたり、トラックもただ聴くだけでなくサンプリング元を探すという楽しみ方を知っているからヒップホップが好きだと言えるのではないだろうか。

注　釈

1　日本人とメキシコ人の両親を持ち幼少期をメキシコで過ごす、その後アメリカや日本で過ごす。

2　2007 年から株式会社サイバーエージェントが運営するヒップホップの総合情報サイト、ヒップホップアーティストのインタビューやニュースなどを主に発信している

3　口や鼻から出す音でドラムやベース、レコー

ドのスクラッチ音などの音を再現するテクニック、日本ではボイスパーカッションと混同されることが多い

4　本名はマルコム・リトル、アメリカの黒人公民権運動活動家で攻撃的な黒人解放運動を行っていた

5　黒人解放運動を行う人、黒人の自決権を要求して黒白分離を主張、黒人自身の社会の建設を目標としている

6　アフリカ系アメリカ人のイスラム教団体、黒人の道徳的、文化的優位を唱えて支配権の奪取を主張している、イスラム教の一派ではなくイスラム教から派生した新宗教と捉えられている

7　カリブ海に浮かぶジャマイカやバルバドスが出自のもの

8　1978年に坂本龍一、高橋幸宏、細野晴臣の三人によって結成された音楽グループ

9　イギリス出身のラジオDJ、音楽評論家。専門はブルース・ロック・レゲエ・カントリーなど多岐にわたる

10　日本のCMクリエイターユニット、ラジオDJユニット。メンバーは桑原茂一･伊武雅刀･小林克也。

11　東京都出身の作曲家、音楽プロデューサー、ピアニスト

12　ドイツの電子音楽グループ、様々なアーティストに影響を与えており、エレクトロダンスミュージックのザ・ビートルズと評価されている

13　アメリカのダンスグループ、ブレイクダンスの元祖的グループである

14　ニューヨーク出身のミュージシャン、ファンクレジェンドと呼ばれている

15　本名は瀬谷章、日本のダンサー・MC・プロデューサー、B BOY PARKの創始者

16　1997年から毎年夏に行われている日本最大のヒップホップイベント

17　本名は石英明。日本初のターンテーブルを楽器として使ったDJ、映画「ワイルド・スタイル」を観てヒップホップに足を踏み入れる。

18　本名は室田隆義。80年代後半から活動している日本のMC・DJ・プロデューサー

19　アメリカの三人組ヒップホップグループ、ローリング・ストーン誌の偉大なアーティストでは48位に選ばれている

20　アメリカのヒップホップグループ、社会・政治的な歌詞を書くことで有名

21　本名は竹前裕。日本のヒップホップMC

22　1988年に千葉で結成されたヒップホップグループ

23　1993年に結成した三人組ヒップホップグループ

24　1992年にMUROとTwigy達によって結成されたヒップホップグループ

25　ZEEBRA･Kダブシャイン･DJOASISによって93年に結成されたヒップホップグループ

26　Q・山田マン・DJ TOSHIら三人によるヒップホップグループ

27　1990年代に活躍したヒップホップユニット

28　1989年にニューヨークで結成された日本人の四人組ヒップホップグループ

29　北海道を拠点にILL-BOSSTINOとO.N.Oの二人組で活動するヒップホップグループ

30　様々なジャンルを取り入れた日本のミクスチャーロックバンド、メンバーはkj、MAKOTO SAKURAI、BOTS、HIROKI、DRI-V、ATSUSHIの六人組

31　本名は横井英之、日本のヒップホップMCでヒップホップグループであるキングギドラのメンバー、『Grateful Days』で共演したDragon Ashのkjを批判したが現在は和解している、2016年に渋谷区観光大使ナイトアンバサダーに就任

32　正式名称は「自由と民主主義のための学生緊急行動」、2015年5月から2016年8月まで活動をしていた、活動メンバーは日本各地の大学生で派生団体も関西・東北・沖縄・東海に広がる

33　本名は石田義則、日本のヒップホップMC、1996年に開催されたヒップホップイベント「さんぴんCAMP」の主催者、対レイシスト行動集団と共に政治運動にも参加している

34　1988年に結成された三人組にヒップホップグループ、メンバーはBOSE・ANI・SHINCO。代表曲は「今夜はブギーバック」

で50万枚を売り上げた。

35 本論文では基本的に即興でラップをする事を指している、

36 1920年から30年に活躍していたアフリカ系アメリカ人のブルース歌手

37 60年代に活躍したアメリカの歌手、グラミー賞やアカデミー賞などの数多くの賞を受賞している。2016年には歌手としては初のノーベル賞を受賞

38 イギリス出身の4人組のロックバンド、テレビでの演奏を嫌いメディアからは距離を置いていた。

39 イギリスのロックバンド、1976年に一度解散したが84年に再結成した。何度もメンバーチェンジを繰り返しながら活動を続けている

40 ニューヨークとロンドンに本部を置くケーブルテレビ番組、24時間音楽ビデオクリップを放送しており90年代末から2000年代前半に若者から人気があった

41 アメリカの音楽プロデューサー・作曲家、グラミー賞などの音楽賞を多く受賞しており、アメリカの音楽界の偉人の一人

42 イギリスのヤードバーズやクリームのギタリストとして活動をしていた、世界三大ロックギタリストとして名高い

43 1987年に結成されたアメリカのロックバンド、全世界のトータルセールスは7500万枚で、2nd アルバム「Never mind」の大ヒットでグランジブームを巻き起こした

44 1991年に結成されたイギリスのロックバンド、2009年にメンバーの脱退により解散した

45 1961年に田辺昭知が結成しGSの礎を築いたグループでブルー・コメッツ・タイガースと共に「GS御三家」と呼ばれた、メンバーは田邊昭知、加藤充、かまやつひろし、大野克夫、井上孝之、堺正章、井上順、前田富雄の8人組

46 細野晴臣らが結成したロックバンド、ドラムの松本隆はダブルミーニングなどの技法を使い日本語ロックの基礎を築いた、メンバーは細野晴臣、大滝詠一、松本隆、鈴木茂

47 忌野清志郎をリーダーとするロックバンド、1991年に活動休止したが2009年に忌野清志郎の死去により事実上の解散となった

48 1959年から活動をしているロックミュージシャン、内田裕也とザ・フラワーズのヴォーカリスト

49 矢沢永吉がボーカルを務めるロックバンド、リーゼントに革ジャンのスタイルで登場しそれまでハイティーン層が多く聴いていたロックを若者にまで広めることに成功した

50 1978年に青山学院大学の学生で結成されたバンド、1980年から2010年代までの4つの世代でチャート一位を取っており広い年齢層から支持されている

51 世良公則を中心に結成されたロックバンド、後にツイストに改名した、ロックをメジャーに押し上げたバンドのひとつである

52 TBSで放送されていた『平成名物TV』の1コーナー、89年の流行語にも選ばれた

53 北海道でTERU・TAKUROを中心に結成されたロックバンド、ベストアルバムは歴代3位の487万枚の売上を記録している

54 1989年に結成されたヴィジュアル系ロックバンド、2000年に活動休止したが10年に活動を再開した

55 1991年に結成された日本のロックバンド、メンバーはhyde、ken、tetsuya、yukihiroの四人組

56 2000年に結成されたロックバンド、メンバーは藤巻亮太、前田啓介、神宮司治の三人組、2012年に活動休止をした

57 沖縄を拠点に活動をしているロックバンド、メンバーはYAMATO、HIROKI、RYO、NAOTO、YOHの五人組

58 1998年に千葉で結成された4人組ロックバンド、2008年に活動休止

59 2000年から毎年8月に二日間千葉と大阪で開催されるロックフェスティバル、当初は洋楽のロックを中心としたラインナップだったが現在ではジャンルに関係なくJ-POPやアイドルなども出演している

60 1997年より山梨県富士天神山スキー場で初開催されたロックフェスティバル、1999年より新潟県湯沢町の苗場スキー場で開催され

ている。国内外200組以上ものアーティストが出演する国内最大規模の野外音楽フェスティバルである

61　1999年より北海道小樽で開催されているオールナイトロックフェスティバル、ジャンルレスだが他のフェスティバルに比べるとロック的なジャンルに沿ったラインナップで観客の年齢層も高くなっている

62　2000年より毎年8月に茨城県ひたちなか市で開催されているロックフェスティバル、ロック以外にもポップス・ヒップホップのアーティストも出演している、会場の中に6つのステージが有り同時進行でライブが行われている

63　2000年から2013年の間にテレビ東京系列局で放送されていたブラックミュージック専門特集の深夜番組である

64　2006年から2007年に日本テレビで放送されていた深夜番組、毎回ゲストとしてラッパーを呼びトークやライブを披露していた

65　水野伸子（2014）「教師の捉える子どものリズム感とその指導」岐阜女子大学紀要第43号　p.56の図4より

66　水野伸子（2014）「教師の捉える子どものリズム感とその指導」岐阜女子大学紀要第43号　p.56の図5より

参考文献

・大串健吾（2010）「音楽のリズムと言語のリズム」『聴覚研究会資料』40（3）p139-144

・小島美子（1991）「日本人の音楽感覚」『日本音響学会誌』47巻11号

・篠原章（1996）『J-ROCKベスト123 1968-1996』講談社

・関口義人（2013）『ヒップホップ！黒い断層と21世紀』青弓社

・谷口眞生子（2011）「ヒップホップについての諸要素 - ブロンクスからイタリアへと -」『大阪音楽大学研究紀要』49号

・佐藤良明「うたうカラダの韻律論」藤井貞和・エリス俊子［編］（2001）『シリーズ言語態2・創発的言語態』東京大学出版会

・水野伸子（2014）「教師の捉える現代の子どものリズム感とその指導」『岐阜女子大学紀要』第43号

・リアルサウンド編集部［編］（2016）『私たちが熱狂した90年代ジャパニーズヒップホップ』辰巳出版

・横山芙美［編］（2016）『ユリイカ　詩と批評6月号』青土社

・「ヒップホップとはこういうものである！」＜http://www.gagle.jp/＞

・「ROCK PRINCESS洋楽ロック年表＆ロック用語集」＜http://rock.princess.cc/index.html＞

・「REFLECTIONS」　＜http://reflections.vis.ne.jp/＞

・「OVERDOSE JAPAN」＜http://tokyo.secret.jp/80s/index.html＞

・「Amebreak」　＜http://amebreak.ameba.jp/interview/2012/09/003195.html＞